

混成の小宇宙 — レユニオン島 —

小田淳一

君の真珠のような歯は芳しい空になんて甘美なのだろう
 思いに耽る夜空の星のようだ！
 でも、僕の魅せられた心の中で輝いている
 烈しい光の方がもっと甘美だ！

岸辺に沿って歌っている海は
 その永遠の眩きを止めてしまおうだろう
 ああ、愛しいネル、僕の心の中で
 君の姿が咲き乱れない前に！

(ルコント・ド・リール「ネル」第3, 4詩節)

レユニオン大学のリヴ助教授は開口一番、「ここは、ありとあらゆるものが、あらゆる意味での混ぜこぜ(mélange)状態にある、言わば混成体験の実験室なんだ」と歓迎してくれた。「混ぜこぜというのはもちろん人間も含めてだよ」と付け足す彼は、マダガスカル生まれの中国系フランス人で、故郷をフィールドとする社会学者である。

民話を比較する際、相互に伝播した可能性(同時発生であったとしても一向に構わないが)を必ずしも否定できない圏内での類話を扱う時、個別的な民話テキストの大まかなストーリーや、それらを構成している様々な具体的要素の欠失や挿入、あるいは置換の有り様は、多かれ少なかれそのテキストが産み出された(そして編み直された)地域の文化や風土と当然ながら関わっている。机上のコード操作だけで何かがわかったような気がしてしまう愚に陥らないためには、異なる文化がコンパクトな箱庭状態で混在している土地を訪れるのが即効薬だと畏友に諭されたことがある。凝縮は時に何かしらの実体的なエッセンスを垂らすこともあるらしい。

マダガスカルとモーリシャスの間にあるレユニ

オンという小さな島は、前回の在外研究の時に知り合ったフランスの研究者が、民話研究をやっているなら一度行ってみてはどうかと勧めてくれた場所である。いつも峻厳な彼がその時浮かべた微笑の意味を量り兼ねたまま、レユニオン大学の人文学部に受け入れてもらうことになった。ただ、この渡航とは別に予定されていた科研による出張の日程がずれたことや、サイクロンのシーズンを避けるため、さらには年度を越えての予算執行ができない等々の理由でほぼ一ヶ月の短い滞在となったことが今でも心残りである。

モーリシャスからレユニオンまでの乗り継ぎ便は、45分間の短い飛行とは言え、一応国際便だから何か食べられるだろうと思い、明け方から5時間の間水だけを飲んで期待していた。ある新聞にマダガスカルとレユニオンを訪れた写真家の記事があり、飛行機を乗り継ぐ度に機内食が口に合わなくなっていくことが強調されていたが、空間的距離と嗜好的乖離の相同性を(恐らくは)無意図的に述べているその稚拙な文彩とは逆に、自分の舌が目的地に近づくにつれて徐々に順応していくのを感じていたからである。双発旅客機での機内

食は予想とは少々異なり、しなびてそり返ったツナ・サンドが一切れとマンゴ・ジュースというヘルシーなものだったが、空腹のせいとそのツナ・サンドがひどく美味に感じられた。最前席で最後に機内食を受け取ったので、紙皿の上に残った一切れを速慮がちにもらおうとしたら、インド系の客室乗務員がそれを制し、数歩先の操縦席に持って行った。最後の一切れは多分機長の朝食になったのだろう。

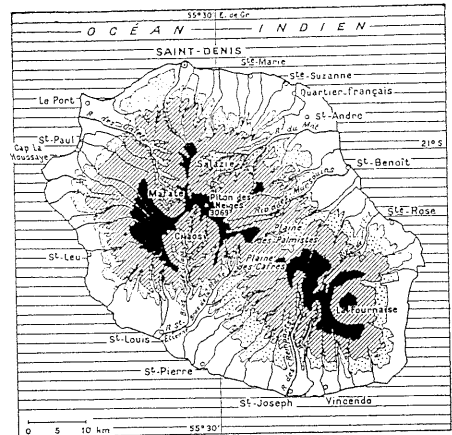
昼前にレユニオンに到着し、宿に荷物を放り込んでまず昼食に出かけた。日曜のせいにかまたく人気のない目抜き通りを探索しながら適当に飛び込んだ所は、典型的なクレオール料理を出す飯屋だった。大皿に飯を盛り付けて豆のスープをかけ、カレーあるいはシチューをつけ、最後に飯の横に激辛のペーストあるいは漬物を添えるというシンプルなひと皿料理が約 400 円である。年代もの大型扇風機が回る音しか聞こえない薄暗い店の中では、数人の先客達が外の眩しい陽光と熱気に嫌気がさした様子で物受けに食べ物を口に運んでいた。ブルボンという、島の古称をつけた銘柄のビールを前に黙考している老人が一瞬こちらに目を向け、すぐにゆっくりとビールの方に向き直った。

レユニオンはフランスの海外県(DOM)の一つで、神奈川県や佐賀県よりほんの少し広い面積を持ち、卵を傾けた形をしている。長軸 72km、短軸 51km、周囲 207km の小さな島で、中央部(と言うよりも海沿いを除くほとんどの部分)は山と圈谷に占められている。自然がしばしば見せるバランス感覚の妙であろうか、北西と南東に 3069m と 2613m の火山をそれぞれ頭目に戴く二つの山塊が覇を争っており、後者を構成する火山の一つは未だに活動状態にある。南海の小島に不釣り合いな大きな山塊(しかも二つである)のために、レユニオンでは微気候(micro-climats)が劇的に実現されることになる。記号論かぶれの建築家が矮小な空間で人工的に作るそれとは規模が異なり、湿潤な熱帯性気候から始まって、乾燥した熱帯性気候、地中海性気候を経て、冷たい温帯性気候に至るまでが狭い地域に混在している。さすがに冷帯性や寒帯性の気候はあり得ないものの、山塊の頂上は冠雪することがある。南東の貿易風がこの多様性に介入するため、湿潤な東側と乾いた西側とは、直

線距離にすると互いに 100km も離れていないにもかかわらず、年間降雨量の比は 5000mm:750mm である。この微気候が生態系にも影響を与えていることは言うまでもなく、動植物の多様さもまたこの島の特徴である。

結局のところ、レユニオンは旅行社の惹句によくある「常夏のパラダイス」そのものと言ってよいだろう。ただ、パラダイスでの日課と言えば、宿と大学図書館の間を市営バスで往復し、名前は知っているが見慣れない産物が溢れる市場で、自分の数少ないレパトリーを逸脱しない範囲で食材を調達し、キッチン付の宿で炊事をしながら昼間集めた資料やメモを整理し、尋常ではない日焼けが他の病いにならないことを願いつつ床につくという、あまり天国では流行らない類の過ごし方だった。

L'ILE DE LA RÉUNION



受け入れ許可の書類を送ってくれたレユニオン大学人文学部クレオール語・フランス語圏研究所(LCF)のマリムトゥ教授は典型的なクレオールである。研究室へ挨拶に行ったところ、若くしてCNRSのユニットを取り仕切っているだけあってさすがに頭の回転が速く、こちらの研究計画を聞いてすぐに適切な指示を幾つか与えてくれた。マリムトゥ氏に連れられて会いに行った人文学部のラチュマナン学部長は、どこから見てもヨーロッパ系の白人としか思えなかったが、名前から想

像できるようにインド系である。レユニオン産のラム談義が一段落したところで、彼は学部の国際交流面での拡充を図るためだろうか、日本の研究者との交流に強い関心を示し、これからも機会があれば積極的に受け入れることを約束してくれた。大学で一番お世話になったのは、人文学部図書館インド洋関連文献資料室長のサフラ女史である。インド系の文献学者である彼女は、こちらが恐縮するほどの時間を割いて貴重な情報を与えてくれた。ブルックリン・カレッジでインド洋の民話を研究している中国系研究者の膨大な業績リストをメール添付ファイルで送ってくれたり（このメールは滞在していた県庁所在地サン・ドニ市にただ一軒あるインターネット・カフェでAA研のサーバを通して受け取った）、レユニオンで民話の採集を続けている語学研究センターのバラ教授にその場で電話をかけてアポイントメントを取らせてくれたりと、有能な *bibliothécaire* の仕事は的確で速い。

学生と接する機会は残念ながらほとんどなかったが、大学のカフェテリアでシュウマイ・サンドをほお張っていると（因みにこれはシューマイ・グラタン・サンドの次に高いメニューである）、中国系の学生から中国語で話しかけられた。バゲットの半分にシュウマイをぎっしり挟んで豆板醤を大量にかけてある代物を口にしてしている時は何をしゃべっても通じないが、口の中のものをようやく飲み込んでから「中国語はできない」と言うと、彼はフランス語に切り替えてくれた。純血の中国人に見えたのでそのわけを尋ねると、彼の曾祖父が中国からレユニオンに渡って以来、少なくとも彼の一族は同じ民族以外とは結婚しなかったらしい。祖先の母語をどうやって保持しているのかを聞くと、「町にある基督教華僑中心語言班の北京語と広東語の子供コースで学んだんだ」と漢字を交えて説明してくれた。混成の地にあってこそ保存の法則はより十全に機能するのだろうか。

キッチンで米を研いでいる頃に日没のアザーンが聞こえてくる。これは目抜き通りにそびえ立つモスクの尖塔からマイクを通して流れているようであるが、半月前にサウジ・アラビアでいやというほど耳にしていたアザーンと比べるとやはり迫力不足である。そのどこか大人しいアザーンが聞

こえてくると、狭いベランダに出て夕暮れ時の空を眺めるのが日課の一つになった。南向きのベランダは山に面しているが首を伸ばすと西側に海も見える。眼前まで迫っている溪谷に様々な形状の雲が低くかかり、それらが刻々と形を変えながら空の茜色と微妙に混じり合う。海側の空は、夕陽の映える空間が山側よりも圧倒的に広いために色合いが少し異なっており、こちらの方は空全体がゆっくりと色調を変えてゆく。日が落ちると山間に点在する人家に灯がともり、この夜景もまた見飽きることがない。ベランダからはヒンドゥー教寺院の裏手が見え、様々な姿態をした神々が徐々に闇に溶け込んでいくのを確認してから部屋に戻ると、ちょうどインディカ米が炊き上がっている頃になる。

夜が明けると暑くならないうちに町を散歩するのも日課の一つになった。ヒンドゥー教寺院の正門側の道を少し歩くと小さな市場がある。市場の脇の小道を抜けると仏教寺院にぶつかり、寺の正面には、そこにあるのが当然のような佇まいをした中華料理店がある。寺から目抜き通りに戻って北に進むと、繁華街の真ん中にモスクがあるが、雑居ビルのような建物の谷間に建てられており、さらには、両側を商店に挟まれた入り口の門はいつもわずかに開いているだけなので中の様子は覗えない。そこがモスクであるとわかるのは、少し



ヒンドゥー教寺院



仏教寺院

離れて空を見上げると尖塔が見え、視線を地上に戻すと目の前に大勢のムスリムがいるからである。目抜き通りの突き当たりから海に向かって歩くと、植民地時代の面影を残す町の北西側に入り、こぢんまりとしたカテドラルが緑の中に現れる。歩いても 10 分程度のこの狭い一角に四つの宗教が混在していることになるが、そのことが逆説的に(と言うよりもむしろそれゆえに)シンクレティズムを忌避させているのに違いない。これも保存法則の機能例の一つだろう。

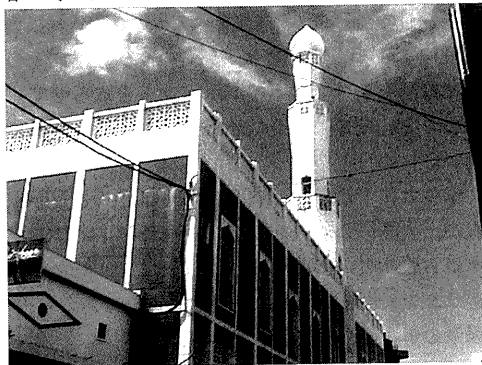
宿に帰る道すがら、そろそろ人出が増え始めた市場に通るかかるとサモサやライチを売る屋台が目につく。レユニオンの物産で有名なのは、コーヒー、ヴァニラ、香料などである。レユニオン原産のコーヒーはブルボン種というアラビカ種の一つで、「幻のコーヒー」と呼ばれて希少種扱いをされているが、これは 200 年前のサイクロンでコーヒー園が壊滅的な被害を受けたために希少になったのだろう。ヴァニラはマダガスカルやタヒチで栽培されているものと同じ品種で、最高の素材を使うと言う触れ込みの日本の料理番組では、ヴァニラを使う時は必ずと言ってよいほどレユニオン



カテドラル

産が用いられている。ただ、品種的にはメキシコ産の方が上質らしい。アロマテラピーの業界ではレユニオンのゼラニウムが珍重されており、過度の緊張/弛緩、躁/鬱という神経の不均衡状態に効果があるとされている。島の風土が生み出すものは、必ずしも日常生活に欠かせないというわけではない嗜好品が主であるが、それはそれでパラダイスに似つかわしい。

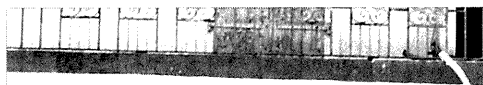
嗜好品でありながら、島の男達の日常生活に欠かせないのがビール(ブルボン)である。市場の前のバス停で、手持ち無沙汰の男達がライチを肴に朝からブルボンを呷っている光景をよく見かけた。失業率がフランス本土よりも高い島では、日暮れ時を過ぎると人気のない通りは物騒だという



モスク

話を聞いていたが、裏通りに入ると、ブルボンの空き瓶が何本かころがり(大抵何本かは割られている)、特徴的なライチの種が散乱しているのを時折目にした。ブルボンは大きなスーパーでパックで買うと 300ml の瓶が一本約 50 円程度である。確かにゼラニウムで鬱状態から抜け出るよりもかなり安くあがる。味は日本の水のようなビールと比べると相当濃いビールであるし、何よりも気に入ったのは、ずっしりとした小瓶しか売られておらず、大瓶や中瓶、缶入り、サーバなどという種類がないところである。ブルボンは絶滅したドードーを商標にしており、時にその商標名で注文されることもある。『不思議の国のアリス』に登場して有名になったドードーはマスカレン諸島にのみ生息していたが、隔絶された島に外敵がいなかったせいかわが退化して飛べなくなり、船乗り達の格好の食料にされてしまった。レユニオンに分布していた白ドードーは 1746 年に絶滅が確認さ

れ、現在ではブルボンの商標と自然保護運動の象徴として姿を残すのみである。子供達の間ではポケモンの一匹として人工の空間で未だに活躍しているが、こちらのドーダーは実在した種とは異なり、細身で双頭である。



ブルボンの商標 (白ドーダー)。クレオール語のキャッチフレーズは「ドーダーここにあり」。

市場が混んでくると、通りの食べ物屋がそろそろ店を開ける時間になる。本格的なレストラン以外の店にはテイクアウトのメニューもあり、その種の店のほとんどは中国系住民が経営している。そのためでもなかろうが、明らかにインド系のマダムがチャイナ・ドレスを着て働いているのを見た時はかなり妙な感じがした。「アル・マディーナ」という名前のスナックがあったので、てっきりムスリムが経営しているのだと思って入ったところ、店を切り盛りしているのはやはり中国系の住民で、ハラル・フードを扱っている。中国料理に欠かせない豚を取って避けるのも商売のうちだと店主は笑って話してくれた。

散歩の途中で、「サンドリヨン (シンデレラ)」の公演ポスターがあちこちに貼られているのを見かけた。ポスターの中で大仰な仕草を見せている俳優たちの風貌や衣装は、明らかに反-西欧 (あるいはもう少し緩やかな非-西欧だろうか) を前面に出している。中国起源とされている物語 (總足が重要なポイントである) が、アメリカ企業のおかげで今では純西欧化されてしまったことを揶揄しているのか、あるいは島の民族構成を素直に考慮しているのか判然としないが、演出はレユニオン在住の劇作家兼俳優で、自前の劇場に加え演

劇学校や出版社まで持っているシャムスなる人物によるものである。帰りに寄るバリで同じサンドリヨンのバレエを観ることになっていたのですが、プロコフィエフの音楽にヌエフが振り付けたものと比較してみるのも面白いと思ったが、公演日程の都合で諦めざるを得なかった。

サンドリヨンのポスターの写真を撮っていると、いつもの「通り雨」が降ってきた。これは微気候の影響らしいが、太陽が燦燦と照っているのにかなり強い雨が降るといふ、このおかしな気候を最初に体験した時は驚いた。空を見上げると、なるほど自分の頭の上に少し黒い雲が流れているが、辺りに雲がまったく見えないのに土砂降りの雨が落ちてくることも時々ある。北部のサン・ドニに滞在しているだけでは、南側の暑さや東側の雨がどの程度のものなのかわからないので、もう少し大きな規模での微気候を体験しようと思い、取り敢えず島を一周してみることにした。



サンドリヨンのポスター

島を回するには長距離バスを何回か乗り継ぐ必要がある。サン・ドニから、島の南にある二番目に大きな町サン・ピエールまでは西回りの特急バスで約一時間半かかり、そこから北東のサン・ブノワまでたどり着けば、サン・ドニに戻るバスに乗

ることができる。宿から歩いて10分ほどのターミナル駅でサン・ピエールまでの切符を買い、バスに乗り込んで発車を待っていると、サモサ売りが二人乗り込んできた。島で売られている4種類のサモサのうち、自分の口に合うのは魚のサモサだけであることは既に確認していたが、油が古そうだったし、途中でトイレを見つけるのも難しそうだったので他の乗客をみならって買うのをやめた。車内の狭い通路を二人のインド系サモサ売りが行きつ戻りつしてから降りた後に、こんどはコーラ売りが大きなクーラーボックスを担いで乗り込んできた。恐らく、スーパーで安いコーラを仕入れ、適当な値を上乘せして売っているのだが、こちらも乗客の冷たい視線を察したのかすぐにバスを降りた。

日の当たる窓際に座り、心地よい振動に揺られてうつらうつらしていると、いきなりパンパンと手を叩く音がして目が覚めた。何が起こったのかと一瞬身構えたが別に何も変わった様子はなく、バスは次の停留所で止まって乗客を下ろし、また走り出した。しばらくするとまたその音が聞こえたので、これは何か尋常ならざる事態ではないかと思って座りなおしたが、バスは相変わらず何事もなく走っている。結局、まどろみながら、途切れ途切れの意識の中で手を叩く音を何回か聞いた。その音は神社で拝礼する時の「拍手」にそっくりだが、手を打つ間隔は長かったり短かったり、まちまちである。ということは不特定多数の人間がバスの中で拍手を打っているということになる。いくら何でもこの地に神道まで入り込んでいるはずはないし、興に任せて大仰な拍手をしている酔っ払いの集団がいる気配もない。居眠りをしているアジア人を起こすのが趣味の人間が乗り合わせているのかと思ひ始めた時に疑問は氷解した。長距離バスとは言え、停留所の数はかなりある。バスの時刻表の裏に「降りる人は運転手にその旨知らせるように」という但し書きがあったのを思い出してようやく合点がいった。拍手と聞こえた音は、次の停留所で下りる乗客が運転手に知らせる手段だったのである。

波の荒いサン・ドニを離れると、すぐに穏やかな海が眼前に広がってきた。島の西から南にかけては観光ポスターに最適な素晴らしい眺めの海水浴場が時折見られる一方で、火山から流れ出した

溶岩が海に流れ込んだそのままの形を残す荒々しい断崖もある。約2時間後にサン・ピエールに着き、時刻表を確認すると、サン・ブノワ行きのバスが30分後にあったので、サン・ピエールの町を見て回るのを諦め、急いで昼食を取ってからそのバスに乗った。さすがに島の南側は夏の終わりとは言えまだ非常に暑く、南東のサン・ジョゼフでしばらく停車した時、外の温度計は35度を指していた。

山塊の東側にバスが入ると予定通り徐々に雲行きが怪しくなってきた。雨が少しずつ降り始め、やがて本降りになるとバスは山越えのルートに入った。しばらくすると、雨は異常な降り方になり、運転手は車を止めてすべての窓を閉めた。最大降水量の世界記録は、12時間雨量から24, 48, 72時間、そして10日間雨量までのすべての「部門」で、レユニオンのこの東側地域が保持している。それらの記録はサイクロンが来る1月に集中しているが、48時間雨量の記録は4月なので、その数ヶ月の間に東側に行く時は天気予報に注意しなければならない。特に1996年の最大日降雨量は1870mmとすさまじいが、10日間雨量に至っては何と5678mmである。日本で最も雨が多い地域の「年間」降水量が約4000mmであるから、その一年半分近い量の雨が10日間で降ったことになる。

バスが北上するにつれて雨は小降りになり、小さな虹を幾つか見た後サン・フランソワを過ぎる辺りから北東の空が晴れているのに気づいた。サン・ブノワに着くと、空は晴れと曇りが相半ばした状態で、道に果物の屋台をまた見かけるようになった。サン・ブノワからサン・ドニまでのバスは通勤に利用する人が多いためか便数がかなりあり、ほとんど待つことなくバスに乗ることができ、約1時間後に宿の近くのバス停で降りた。もちろん、降りる前には手を叩いて、運転手に合図することを忘れなかった。

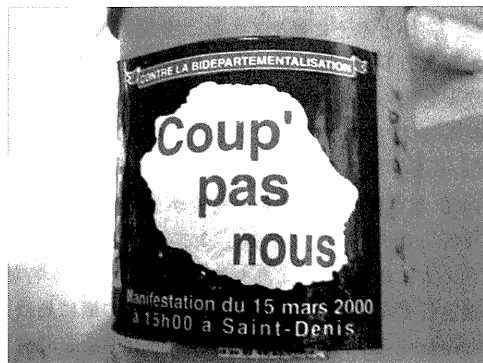
小さな中華料理店で遅い昼食をとっていると、クレオルの老人がブルボンを片手に話しかけてきた。サン・タンドレに住むそのポワイエ氏は、辛いペーストにむせながら食事をしているこちらに構わず、レユニオンの「分割」問題についてとうとうと自説を述べ始めた。レユニオンを南北二つの県に分割する(bidépartementalisation)という案は20年ほど前から繰り返し議会で審議されてき

たらし、近々採決されることを受けて地元テレビは毎日のトップニュースで取り上げ、住民達へのインタビューを放映している。この問題の構図はレユニオンにしては珍しく至って単純で、大まかに言うと、島北部の住民は反対で南部の住民は賛成である。

反対側の言い分は、こんな小さな島を今更二つに分ける必要がどこにあるのかということに尽きる。我々は民族も宗教も異なるのに仲良く暮らしているのだから、分割など余計なお世話だ、ということである。では何故、思いを同じくするであろう南部住民が賛成なのかと言うと、これには別の話が絡んでくる。様々な民族が共生しているとは言え、レユニオンでは政治や経済の中心がサン・ドニとその周辺地域にあることは事実である。本土よりも高い失業率の下で限られた雇用の需要は北部に集中し、県としての様々な施策の決定権も北部が握っているという、典型的な一極集中である。賛成側にしてみればこの一極集中は受け入れ難いものであり、分割されることによって南部が県に昇格し、北部が独占している感のある、もともと少ないパイの正当な分け前を少しでも取り戻したいというのが本心だろう。審議と採決の様子は地元テレビで長時間中継されていたが、小さな島の更なる分割について、それぞれの民族を代表する議員達が南北の選出地域に分かれて舌戦を繰り広げる様子を見ているうちに、ともすれば住民の意思確認を棚上げしたまま市町村の合併が進む日本の現状を思い出した。両者は一見、対極的な関係にあるように見えるが、ある種の合併は異なるレベルでの分割を生み出すのであり、その逆もまたあり得るだろう。

レユニオン (réunion) というのは「集う」ということなのになあ、と二本目のブルボンを飲み干してからポワイエ氏はほやいた。彼は北部の住民なのでどうやら反対意見のようであるが、1946年のレユニオン県設置以前を知る身には色々と思うこともあるのだろう。3月15日に大規模な反対デモがあるのでお前も来ないか、と誘われたが、政治が絡むとフランス人はとかく興奮する性質なので、ややこしいことに巻き込まれるのはやめにしておいた。分割問題の真の事情はもっと複雑であるかも知れないし、あるいはもっと単純であるかも知れない。結局その分割案は、人口比で選出議

員の数が多い(であろう)北部が優勢にことを進めたようで、議会で二度否決された。次にこの問題が人々の口の端に上るのはいつのことになるのだろうか。



大学構内に貼られていた分割反対のビラ

島に人が住み始めてからレユニオンという象徴的な名を持つに至るまでの歴史は、かなり錯綜している。16世紀初頭に作られた各種のポルトラノ海図には、既に色々な名前で島の存在が示されていたが、公式にはポルトガルの船乗り達がレユニオンを発見したことになっている。1520年、ポルトガルのインド植民地総督 Pedro de Mascarenhas がレユニオン、モーリシャス、ロドリゲスから成る島々に自分の名を冠し、それが現在のマスカレン(仏語ではマスカレーニュ)諸島の名の由来である。フランスで取り敢えず Mascarin と呼ばれていた島は、1638年にフランス王の名において所有を宣言されるが(1642年に正式に追認)、最初の住民はマダガスカルの司令官に逆らって追放されたフランス人不平分子のグループだった。後任の司令官が反逆者達の様子を見に来た時に(1649年)島の名前は Bourbon となった。これはもちろんフランス王家の名である。1663年に東インド会社の寄港地として本格的に植民地化が始まり、この年が一般にレユニオンの「歴史」の幕開けとされている。

「革命」の熱が冷め遣らぬ1793年、国民公会が島の名を Réunion と定めた。同年にサヴォワ地方やニースを併合 (réunion) してきた勢いであろうが、それにしても安直な命名である。あるいは、島の名に和合という理想主義的象徴を仮託しよう

との思いがあったのだろうか。翌 1794 年に国民公会は植民地における奴隷制廃止を決めるが、当の植民地国民議会は、現地の事情を知らない本土が勝手に発したものだとしてこの政令を拒否する。国民公会がつぶれ、ナポレオンが帝位についてから、何かと本土に楯突くレユニオンに乗込んで来たマスカレン諸島の総督は、英国がこの島を虎視眈々と狙っているのを知り、皇帝が南の小島にも関心を払ってくれるように島の名前を勝手に Bonaparte に変えてしまう。その甲斐もなく島は 1810 年英国の手に落ち、何故かまた Bourbon になる。1815 年のウィーン会議で英国はしぶしぶフランスに島を返し、ようやく Réunion という名が確定して現在に至っている。約 170 年の間に島は、Mascarin, Bourbon, Réunion, Bonaparte, Bourbon, Réunion と名前が変わったわけであるが、この先決して変わらないという保証はない。

Reunion という名が定まった以降はその名に相応しく、1841 年に奴隷制が事実上終わりを告げた後、インド、マダガスカル、中国からの移民が増え始め、19 世紀終わり頃からは特定の地域からの、あるいは特定の宗教を持つ集団がまとまってやって来る。タミールからのインド人、広東省からの中国人、また les z'arabes と呼ばれるインド系ムスリム達である。民族間や宗教間の本格的な紛争が起こるには、民族と宗教の種類は少々多すぎたし、島は余りにも狭すぎたようで、静かな共存共栄が現在も続いているように見える。尤も、分割論争のようなフランスの国内問題としての契機が巡ってくる度に、レユニオンは過去と未来の狭間



アコーディオン弾きのデマイユ氏。

スタンダード・ナンバーしか弾かない。

で少し揺れることもあるだろう。これとは別に、島の地勢上の位置はアジアとのつながりにおいて時に微妙な目的に供されたこともある。例えば、ベトナムのグエン朝の皇帝の一人はこの地に流され、台湾に売却されたイギリス艦は島の港が引渡し場所であった。

大学へ行くバスは海沿いの道路を少し走った後、山側へ折れて大きな通りに入る。この大通りには高踏派の領袖であった詩人ルコント・ド・リール (1818-1894) の名が付けられている。彼は最初の島都サン・ポールに生まれ、幼少期、少年期、青年期にそれぞれ数年間島で暮らした。どの研究書にも「生地レユニオンの壮麗・豊穡な自然が異教的・汎神論的素地をもたらし、間近で見た奴隷制の不条理が後年の共和思想に影響を与えた」とあるが、この常套句はあながち的外れでもないと思われる。尤も、共和思想の方は詩人には余計なものであったのか、壮年期を過ぎると影を潜めてしまう。あるいは農園主として大勢の奴隷を使っていた父に、多感な少年が過剰反応しただけかも知れない。

1843 年に里帰りしたのを機に彼はスピノザの汎神論及び古代ギリシャの異教主義に傾倒してゆく。本土での冷却期間を経て再び島に対峙した詩人がその詩才を徐々に開花させる過程には、詩テクストそのもの以上の詩趣を感じざるを得ない。2 年後に本土に戻った彼は（その後島に相見ることにはなかった）やがて厭世観に陥り、汎神論から古代インド宗教に没入する一方で、キリスト教の外典やインド、フィンランドを初めとする北欧、ケルト、アラブ世界、ポリネシア等々の神話や伝説を漁り、それらから詩想を得ることになる。島を決定的に離れることによってシンクレティズムが発現するという詩神の業に我々は改めて瞠目するのである。

パリで没したルコント・ド・リールはモンパルナスに葬られたが、約 80 年を経て遺灰は生家から少し離れた海辺の墓地に埋葬された。墓参りを兼ねてサン・ポールの生家を訪ねると、どういう事情があったのかわからないが中華料理店に様変わりしていた。ルコント・ド・リール通りと名付けられた道に面したその店の横には、彼の生家をサイクロンから守っていたであろう大木が残ってお

り、辛うじて往時の面影を保っていた。

帰国してから近くの大学図書館へ彼に関連する文献を探しに行ったところ、『夷狄詩集』と多分高校生向け程度の解説書の二冊しかなかったのが驚いたが、多くのメジャーな作家の全集を網羅しているガリマール社やガルニエ社の叢書にもないところを見ると、島の書店に積み上げられていたルコント・ド・リールの研究書のほとんどが島の出版社から出ていることも納得がいく。唯一の全集は既に絶版で、現在はリプリント専門のスラトキン社が刊行しているの、最早気軽に手が届く価格ではなくなっているだろう。

ルコント・ド・リールの『古代詩集』を構成する「スコットランドの歌」の中的一篇「ネル」は詩テキストそのものよりも、フォーレが旋律をつけた歌曲の方が人口に膾炙していることはまず間違いない。フォーレに関しては、三流詩人の詩を一流の歌曲にした功績とその逆の事例を合わせて考えることが必要であるが、「ネル」のケースは、詩と音楽の幸福な邂逅としては最良の部類に入ると言えるだろう。フォーレがよく行なう、旋律に合わせるための詩テキストの改編という越権行為も「ネル」についてはほとんどない。

「ネル」の原調は伴奏者泣かせの変ト長調である。歌い手にとっても原調のテッシトゥーラは(最高音の As もそうであるが) 技術的に難度が高い。慎重な歌い手はよくホ長調に移調された譜を使うが、詩テキストが持つルコント・ド・リール特有の硬質性、眩い色彩感、そして繊細ながらも力強い彫塑性は変ト長調でしか聞こえてこない。ホ長調で奏されるこの曲はくすんだ色合いのレプリカに過ぎないのである。調性の「性格」という観点からも、「ネル」が変ト長調であることにネイガウスは恐らく賛同するだろう。

「ネル」には他の詩テキスト中に現れる「島」や「山」などの明示的な鍵語は少ないが、それゆえ聴き手に対し、レユニオンのイマージュの無限の選択可能性を与えている。それとは逆に、鍵語を多く含むテキストに過剰な価値付与を行なって書かれた曲もある。レユニオン在住のインド系音楽家チュティ氏の作品群がそれである。それらの曲は、音楽家の友人であるところの、件の脚本家兼俳優兼演出家のシャムス氏が朗読をした他の詩

を加えて CD になり、シャムス社から出版されている。同じくシャムス社から出ているルコント・ド・リール選集の巻頭には、脚本家兼俳優兼演出家兼演劇学校オーナー兼出版社オーナーであるシャムス氏と島の高校教師らによる長々しく騒々しい対談が収められ、巻末近くにはルコント・ド・リールの詩による音楽の一覧が載せられている。そこに、フォーレやショーソン、ルーセルらの数少ない珠玉のような曲と並んで、チュティ氏の十数曲がちゃっかりと挙げられているのを見て、郷土の誇りに祭り上げられるのとプレイアッド叢書に全集が入ると、本当のところはどちらを望むかを詩人本人に尋ねたい気がした。

ルコント・ド・リール没後 100 年を記念して編まれたその選集には、ボードレールが詩人に寄せた最大級の賛辞(の同じ引用箇所)が随所に散りばめられているが、実は引用されていない部分に「植民地生まれの白人にまともな文学者はいないが彼だけが唯一の例外である」という旨の、いかにもボードレールらしい言説がある。本土の大手出版社が殊更その前半部分を支持していると考えるのは果たして誤りであろうか。

ボードレールは 20 歳の時に、独立不羈の精神に欠ける義理の息子を何とかしようとしていた旅団長の義父によってカルカッタ行きに船に乗せられ、モーリシャスを経て 1841 年 9 月下旬からしばらくの間レユニオンに滞在している。ボードレールはこれ以外に長旅はしていないはずなので、彼の詩に散見する熱帯のイマージュの源を辿ればレユニオン、あるいは少なくともマスカレン諸島に至ると判断して差し支えないだろう。『悪の華』の一篇「クレオルの婦人へ」は、彼がモーリシャス滞時に世話になった当地の詩人の夫人に献呈したソネであるが、彼女は後にレセップスの義母となる。19 世紀後半からのレユニオンの経済的、政治的衰退の最大の要因は周知の通り、スエズ運河の開通である。

ボードレールがレユニオンに滞在していた時期、3 歳年上のルコント・ド・リールは本土にいたが、もしこの時二人が島で出会っていたら、それは少々話が出来過ぎというものだろう。ルコント・ド・リールとボードレールは後に本土で親しく交わるが、二人が島についてどの程度語り合ったかは定かではない。ルコント・ド・リール (Leconte

de Lisle) を主人公とする「島のお話」(Le conte de l'Île) は、オデュッセウスの流謫刑をテーマとする民話の類話としては指標的モチーフが多すぎるようである。ただ、それらの要素を拾い上げていきながら、レユニオンの風土の断片が類話においてどのようにモザイクを成しているかを解きほぐしていくのは興味をそそられる作業である。指標的モチーフの混成と混在は、機能的モチーフの連続と交替に必ずや関与しているはずだからである。



ルコント・ド・リールの墓

リヴ氏はレユニオン大学へ赴任する前はパリの社会科学高等研究院に在職していたのでパリにも居を構えており、年に2回の長期休暇は本土で過ごすらしい。パリの中華街について彼と話しているうちに一軒の中華料理店を紹介された。Fleurs de Mai というその店は、うっかりすると通り過ぎてしまうほど小さな店だが、最上の広東料理をそこで味わうことができる。味を保証するのは、店員の徹底した無愛想さと、客のほとんどが中国系であることだ。近隣の、小奇麗で愛想がいい店員のいる中華料理店が、西欧系パリジャンを専ら引き受けているようである。店を出て左に進むと、通りを一つ越えてガブリエル・フォーレ高校があり、そのすぐ先にレユニオンの物産を扱う中国人の店が続いている。ルコント・ド・リールの生家が中華料理店になっていなければ、この一帯に見る、不思議と言えなくもない相関図にそれほど思いを致すことはなかっただろう。ただ、ここには混成と呼び得るものはまったく存在しない。

本土に滞在している時よく観るクイズ番組があ

る。3月の終わりだったので歴代の優勝者を一堂に集めてシーズン毎のチャンピオンを決定する特別編をたまたま見る事ができた。解答者のうちレユニオンのサン・ジル市で中学校の教師をしていたという男性が準々決勝で敗れたものの、副賞として獲得したのが何とレユニオン旅行だった。この思いがけない符合への司会者の気の利いたコメントと、当人の何とも言えない苦笑に会場はどっと沸いた。

その夜ガルニエで「サンドリヨン」を観た後、土砂降りの雨の中をバス停まで走って行くと、最終らしいバスが発車しようとしているところだった。それを逃すと雨に濡れながらタクシーを待つ羽目になるので慌てて回数券を出そうとしたら、バスの後部にレユニオンの観光案内広告が見えた。数日前まで当たり前のように眺めていた、太陽の光が降り注ぐ海岸と緑濃い山々を背景にした 'Réunion intense' という踊るような文字を目の前にして、はてどう訳したらぴたりくるだろうか、と考えているうちにバスは走り去っていった。



強い海風を常に受けて撓んだ木。

何故か親しみを感じる。

今回の在外研究に際し、渡航前に深澤秀夫所員からレユニオンに関する文献をお借りすると共にリヴ氏を紹介して頂いた。また、研究振興係の岡田健一氏には様々な面で大変お世話になった。末尾ながらここで両氏に謝意を表したい。